歴史を歩く34

『戦国時代の群像 ～最終話 明と暗～』

肝付町高山本城跡近くに道隆寺跡がある。開山は鎌倉時代の寛元4年（1246年）、宋から渡って来た禅僧 臨済宗大覚派の蘭渓道隆によるものと江戸時代の三国名勝図会に記されている。蘭渓は建長5年（1253年）に時の執権北条時頼に招かれ、鎌倉へ赴き、建長寺を開山した人物でもある。

道隆寺跡に島津第11代忠昌夫妻の逆修供養塔がある。逆修供養塔とは、生前にあらかじめ自分のために仏事を修して、死後の冥福を祈り建てられた塔のことである。

永正3年（1506年）、島津忠昌は鹿屋市串良町柳井谷に陣を構え、肝付兼久の構える高山本城への攻撃を行った。しかし、忠昌の総攻撃もうまくいかず、さらに兼久の救援にあたった志布志の新納忠武に背後を衝かれ、無念のうちに鹿児島に引き上げた。この時、逆修供養塔を造ったと考えられている。忠昌は高山の地を手中に治めた時は、位牌を高山寺の上にある瑞光寺に祀るようにと遺言を残し、永正5年（1508年）2月15日に、自ら命を絶った。

大正4年（1576年）肝付兼護が総力を挙げて伊東氏討伐を行ったものの、大敗を喫した。残された主力をも失った肝付氏はその領土の大部分を救援に来た島津氏の武将が領することとなり、ただ高山の地だけが肝付氏の所領として残った。

そして天正8年（1580年）12月、肝付氏は、長元9年（1036年）以来540年以上支配してきた高山の地を没収され、薩摩半島の阿多に移され、12町の知行を与えられた。兼続の頃の所領は12万石と言われていたが、兼続の死後15年もたたないうちに、肝付氏はここまで失墜したのである。

すでに島津忠昌の死から72年が経っていた。忠昌の遺言どおり位牌は瑞光寺に祀られたのである。やがて忠昌の逆修供養塔は柳井谷の陣の下、渕輪から道隆寺に移された。

一方、日向・大隅・薩摩の三州を完全に制覇した島津氏もまた、この後も波乱は続いた。天正6年（1578年）に耳川の戦いで、豊後の大友氏に勝利し、天正12年（1584年）の沖田畷の戦いで、肥前の龍造寺氏を撃ち破り、九州最大の戦国大名へと成長した。しかし、九州制覇も目前に迫っていた天正15年（1587年）、豊臣秀吉の九州征伐を受け、島津氏は降伏した。

島津氏の帰順後の秀吉の処置は寛大なものであった。島津義久は薩摩国守護を安堵され、島津義弘は大隅国守護を安堵された。ただ、肝属郡一円は一代限りの条件付で伊集院忠棟が治めることになった。この時、大崎も伊集院の領するところとなっている。

伊集院忠棟は、自らを人質として秀吉に降伏し、島津氏の赦免を願い出るとともに、島津氏には降伏を勧めるために説得をした人物である。あの石田三成も認める才覚の持ち主であった。しかし、それゆえ島津氏よりも豊臣政権と深く結びつき、文禄4年（1595年）に領内で太閤検地が行われた後は、北郷氏に代わり日向諸県郡庄内の地に8万石の所領を与えられたり、検地後の知行配分の責任者に任命されたりなど、独自の権勢を誇るようになった。

この伊集院氏の勢いは島津氏の危険視するところとなり、慶長4年（1599年）3月9日、島津義弘の三男 島津忠恒（後の家久）によって京都伏見で伊集院忠棟は謀殺された。

これに伴って3月20日、伊集院忠棟の子忠真は都城周辺の城を固め、島津氏への対抗姿勢を見せた。忠棟殺害について、石田三成は怒りをあらわにし、島津義久、義弘を責めたが、五大老の一人であった徳川家康は島津忠恒の行動に同調していた。

五大老会議で許されて帰国した忠恒は6月に兵を率い、伊集院忠真の攻略を行ったが、9月になっても決着がつかず、徳川家康の使者山口直友の仲介で島津氏・伊集院氏は和解した。この事件を『庄内の乱』と言う。

慶長5年（1600年）には関ヶ原の戦いで島津義弘は西軍に属していた。結果として西軍は敗れ、義弘は敵中突破を行い、多くの犠牲を出した。しかし島津氏は関ヶ原の合戦後、徳川家康に陳謝し、薩摩、大隅、日向の所領はそのまま安堵を認めさせることに成功する。そしてようやく、郷土も長い戦乱の時代に終止符を打つことになった。島津氏は見事に戦国の世を生き抜いたのである。そして、この後250年以上にわたって薩摩藩主として薩摩・大隅・日向を治めていくことになる。

ところで、関ヶ原の合戦における島津の敵中突破で命を落とした家臣に肝付兼護がいた。そしてわずか9歳の若さで肝付兼幸が肝付本家を継承する。しかし、兼幸も慶長15年（1610年）、島津家久が琉球王国第二尚氏王朝第7代目の国王である尚寧を連れて上洛した際に家臣として同行し、帰国途中に暴風雨に遭い、難破。兼幸はわずか20歳で命を落とす。

兼幸には妻も子もいなかった。そして兄弟もいなかった。つまり、肝付本家の血統は兼幸の死によって完全に断絶してしまったのである。

大崎町益丸、国道からキャンプ場へ60m程進んだ道路脇に小さな六面地蔵がある。島津義弘が戦ケ島の戦いの戦死者の霊を鎮めるために建てたものであると伝えられている。

戦国期における争乱の中で、多くの武将がその野望を散らしていった。争乱の時代を生き抜いた者は、散っていった人々の無念を背負って生きなければならなかったのである。

（大崎町教育委員会　内村憲和）